

目的；現代の若者が、着物に馴染まない理由のひとつに衿の問題がある。この点に着目して本研究では、一般に行われている衿の採寸方法を用いて、大裁女物単衣長着(ゆかた)を製作し、それを製作者各自が着用してみることにより、衿寸法について、主観的な判断と客観的な判断とを調査した。この調査により、衿の採寸方法及び適正な衿寸法について考察するものである。

方法；共立女子大学家政学部・被服構成和裁の授業履修者141名を対象に、アンケート調査と面接調査を行った。ゆかた製作のための衿の採寸方法は、上肢を横に水平に挙げそれをそのまま15度下げた状態で、背中心(第7頸椎の棘突起の先端)から手首のくるぶし(尺骨頭の外側面の中心点)までとした。この衿寸法により設定した肩幅と袖幅によってゆかたを被験者が製作した。出来あがったゆかたを各自で着用し、半幅帯を締めた状態で衿の長さをどう思ったか、それはどのような動作の時であったかを、質問紙により選択式で回答を求めた。又、面接調査では、上記と同様にゆかたを着用し自然に手を下げた状態で衿と手首のくるぶしとの関係を測定検討した。

結果；衿の長さについてちょうど良いと答えた者は68% 次いで短いと答えた者25%であった。衿と手首のくるぶしとの関係の測定では、手首のくるぶしから袖口の布端までの寸法が2cmの状態では衿の長さがちょうど良いと答えた者が多かった。しかし従来の着物の観念では、4cmの状態の時ではちょうど良いと判断出来る。ここに、現代の若者の着物寸法(特に衿)に対する洋服感覚があらわれていることがわかった。